

◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。

◎良質たい肥の生産・利用で、自給飼料の安定確保に努めよう。

乳用牛

◇ 分娩時の事故防止

1 分娩直前の飼育環境

分娩予定牛は、清潔で寝起きがしやすい環境で飼育する。やむを得ず繋いだままで飼育する場合は、敷料を十分に敷くとともに、子牛の転落を防ぐため、尿溝を鉄板等でふさぐ。

2 分娩時の対応

分娩は、強い陣痛、一次破水、足胞(子牛の足が透けて見える胎膜)の露出、二次破水(足胞が破れる)の順で進行するので、次の点に注意する。

(1) 一次破水が起きた後、1時間以上経過しても足胞が見られないときは、逆子や子宮捻転などの疑いが考えられるので、内診を行う。

また、陣痛が弱い場合は、経産牛では、特に低カルシウム血症による陣痛微弱の可能性が考えられるため、カルシウム剤の投与を行う。

(2) 足胞を形成している膜は、産道を開くために重要な役割を担っているため、基本的に人為的に破らない。

ただし、足胞が見られた後、30分以上経過しても分娩が進まないときは、逆子や低カルシウム血症の疑いがあるため、同様に内診やカルシウム剤の投与を行う。

(3) 二次破水後も十分に産道が開いていない場合は、原則として、けん引しない。しかし、2時間程度経過しても進まない場合は、産道から消毒した手指を入れ子牛の蹄の間をつねるなどして状態を確認する。反射的に引っ込める反応がない、もしくは弱い場合には、けん引する必要がある。

肉用牛

◇ 繁殖牛の退牧後の飼育管理

1 飼育管理

(1) 舎飼い開始時は、配合飼料の給与量を徐々に増やすなど、飼料を急に変えないようにする。

(2) パドックでの運動や日光浴、ビタミン剤の給与等により良好な発情回帰に努める。

また、朝夕は牛を必ず観察し、発情を見逃さないようにする。

(3) 授精後60日をめどに妊娠鑑定を受け、1年1産に努める。

- (4) 配合飼料の増飼いは、分娩2か月前から概ね離乳までの期間に実施する。給与量は、牛のボディコンディション（栄養度）を観察しながら加減し、牛を太らせすぎないようにする。
- (5) 蹄の伸び過ぎは、牛のストレスや、蹄病をはじめとした疾病を引き起こす恐れがあるため、削蹄を適切に行う。

2 疾病対策

- (1) 子牛の下痢、肺炎の発生が多い農場では、消毒の実施や換気の改善等の対策を行うとともに、母牛へのワクチンの活用も検討する。実施方法等については、獣医師や家畜保健衛生所に相談する。
- (2) 農場内への病原体の侵入を防ぐため、適切な消毒の実施や毎日の健康観察など、飼養衛生管理基準の順守に努める。

豚

◇ 冬期間の飼育管理

- 1 成豚の最適環境温度は15～18℃であるが、子豚は寒さに弱く、分娩直後から生後1週までが30℃、生後2～3週で25℃、生後2～3か月で20℃の温度が必要となるので、温度管理に注意する。
- 2 新生子豚は極端に寒さに弱いため、保温箱の設置のほか、床に稲わら等の敷料を敷いて保温を行う。
- 3 寒さによる発育の停滞や飼料効率の悪化を防ぐため、すきま風の防止や適切な保温などの防寒対策を徹底する。
- 4 寒風の侵入防止には、扉へのくぐり戸の設置や透明ビニールののれんを下げるなどの方法が有効である。また、スノコ式豚舎では除ふんピットからの冷気の侵入防止のために、排せつ口等にカーテンを下げるなどの工夫をする。
- 5 防寒対策により豚舎の密閉状態が多くなると、呼吸器病のリスクが増加するため、室温を確認しながら換気を行う。

鶏

◇ 高病原性鳥インフルエンザ等発生防止対策

渡り鳥が飛来する季節になり、本病発生のリスクが高くなるので、発生予防のために、次のことに注意する。

- 1 鶏舎への野鳥やネズミなど野生動物の侵入防止を徹底するとともに、その排せつ物が飼料や水に混入しないようにする。
- 2 ウイルスを舎内に持ち込まないように、鶏舎の出入口に踏込み消毒槽を設置して消毒を徹底する。また、鶏舎ごとに専用の作業衣や作業靴等を使用する。
- 3 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。また、出入りの情報を記録し、少なくとも1年間保存する。

- 4 異常鶏の早期発見に努める。異常鶏が認められた場合は、速やかに家畜保健衛生所等の関係機関に連絡し、指導を受ける。

草地・飼料作物

◇ 越冬前の草地管理

- 1 造成後3年以上経過した草地は、土俵の酸性化が進み、土壌中のミネラル含量が低下していることが多いので、土壌診断をした上で石灰や苦土等の土壌改良資材を施用する。
- 2 早春の追肥が遅れがちな放牧地などでは、終牧後に追肥を行う。

◇ たい肥の適正利用

- 1 たい肥は十分腐熟させ、土壌改良資材や肥料資材として、積極的に草地・飼料畑で活用する。
- 2 たい肥の肥料成分は畜種、副資材、たい肥化方式などによって大きく異なるので、あらかじめ成分含量を把握した上で適正に施用する。
- 3 草地に対するたい肥の施用量は、10a 当たり 2～3 t 程度とする。この場合、翌春の化学肥料の追肥量は、たい肥中の成分含量に応じて減らす。
- 4 サイレージ用とうもろこしの作付予定ほ場は、秋のうちにたい肥を散布し、耕起することにより、翌春の作業競合が回避できる。たい肥の施用は 10a 当たり 4～8 t の範囲とし、施用量に応じて翌春の化学肥料を減らす。

◇ とうもろこしサイレージの利用

- 1 サイロ開封時にはカビの有無を確認し、カビが発生した部分は廃棄する。また、サイレージを給与した家畜に食欲不振、下痢等のカビ毒症状が見られる場合には、カビ毒吸着剤を投与する。
- 2 サイレージは水分含量を測定し、乾物給与量を正確に把握する。また、飼料成分を分析し、飼料設計に活用する。
- 3 サイレージが発熱し、二次発酵が起こった場合は、表面から 50～60 cm を廃棄し、 m^2 当たり 600 g のプロピオン酸を水で 2～3 倍に希釈して散布する。その後、サイロを再密封して 15～20 日間放置し、安定するのを待って給与する。プロピオン酸は強い刺激があるので、メガネやマスクを着用して取り扱う。
- 4 プロピオン酸カルシウムなどを主成分とする二次発酵抑制資材も市販されているので、特に夏場に給与するサイレージには積極的に利用する。

環境保全

◇ 良質たい肥の生産

- 1 家畜排せつ物のたい肥化を進めるため、必要に応じてオガクズやモミガラ、稲わら、戻したたい肥等を混合して水分を調整し、通気性を確保する。良好な発酵が始まるたい肥原料の水分は、概ね表のとおりであり、目安としては、原料の容積 10 リットルが 7 kg 以下

の容積重となるようにする。

※容積重の測定法：容器いっぱいにはたい肥原料を力を加えずに詰め、容積（リットル）当たりの重量（kg）を算出する。

2 切り返しを月に1～2回実施すると、概ね5か月間で完熟堆肥が生産できる。

表 発酵が始まる水分

畜種	副資材不使用	戻したい肥混合	オガクズ混合	モミガラ混合
牛	65%以下	68%以下	72%以下	75%以下
豚・鶏	55%以下	58%以下	62%以下	65%以下